

東北地区研究会報告（1997年度）

日 時：1997年11月25日（土）13時～

場 所：仙台青年文化センター

出席者：松村和則、佐藤利明、松岡昌則、横山敏、大川健嗣、細谷昂、東海林仲之助、
劉文静、三浦昇、中島信博、小林一穂、保木本利行、久保美紀、泉館智寛、
菅野俊作、佐久間政広、佐藤直由

テーマ：農村・中山間地・山村における現状と地域課題

1997年度の東北地区研究会は、第45会大会の後の平成9年11月25日に、17名の出席者を得て、仙台市の青年文化センターで開催しました。研究会テーマを「農村・中山間地・山村における現状と地域課題」と設定し、2時間半にわたって熱心な話し合いが行われました。

平年と違って、今回初めて大会後の開催となりましたが、その趣旨は以下の二点にありました。ひとつは、大会での自由報告、テーマ報告に東北地区会員からの報告が多かったので、それらの報告をめぐってもう一度討議を深めたいということ。これには報告する側と報告を聞く側の消化不良を解消したいということも含まれていました。もうひとつはテ

ーマセッションの山村再生問題とシンポジウムの中山間地問題における村落研究にとっての重要性を考え、東北地区会員のあいだでも大会時の報告と討議を振り返りながら話し合いをしてみたいということ。これには村落研究の現段階における課題について認識を深めたいということが含まれていました。以下、話し合いの内容について簡潔に取りまとめて紹介します。

はじめに久保美紀会員（民俗行事の伝承過程の変容）、佐久間政広会員（山村における住民生活の構造）の自由報告をめぐっての質疑が行われました。まず、久保会員の報告に対しては、大会報告時の質問を踏まえた上でさらに、調査対象の北上市NS集落における地区と行政区と契約会の関係や、「小正月」行事と契約会活動、家関係についての質問や疑問がだされました。久保会員から大会時の発表ではあまり触れられなかった集落内の地域集団関係や家関係について詳細な説明があり、それを受けて意見交換がおこなわれましたが、契約会のなかの家関係が「小正月行事」の伝承と維持の基盤にあるのではないかと、という観点に参加者の意見が集約され、今後の調査はその解明が検討課題ではないかということが提起されました。つづいて佐久間会員に対しては、大会会場で提起された問題（一 高齢者（高齢者世帯）にとっての「むら」（地域社会）の意味は何か。「後継ぎの仕事」と「子の教育」という論理による直系家族の解体というとらえかた。一）について見解を述べてもらいました。佐久間会員は、人間関係と生活の安全保障が地域生活を維持させているのではないかと考えるが、しかし同じ集落の中でも家の出自による差異が見られるということも指摘しました。これを受けて意見交換がおこなわれましたが、その地域に住む人にとって生活の便利さとか生活の安定感は人間関係から得られているのではないかと、しかも子供が家から（地域から）出ても近距離の都市に居住することで安心感を持っているのではないかと、といった意見が出されました。

テーマセッション、シンポジウムをめぐっては、はじめに報告者でもあった大川健嗣会員に全体的なまとめと特に今回主張しておきたかった点について述べてもらい、続いて大会に参加した横山敏会員にコメントをお願いしました。大川会員は大会報告を振り返りながら、山村に住む人がいれば山村政策は必要であること、その中には松岡昌則会員の報告事例のように安定的な集落もあるが、他方では戦略を必要とする限界集落も存在すること、そうした集落が存在する地域にはインフラの整備も必要であること、しかしインフラ整備は可変的要因であり、一方で人の流出・過疎を誘引させることもあるが、他方で所得の向上を招くということもあること、従って輪切りの都市と山村の目録比較で地域を捉えることは意味がないこと、地域の活性化の手段は多様であってよいこと、等を述べました。横山会員は、きれいな図式では村を今や捉え切れないように思うこと、また、自治体の役割は大きいし、不可欠にもなっているが、多様な施策がそれぞれ地域生活の維持にどれだけの波及効果をもたらしているのかをもっと検討することも必要ではないか、という意見を述べられました。

これらをもとに意見交換が行われましたが、松岡会員は、大会での報告を補完する形で意見を述べられました。それは、限界集落といわれるような村でも住人が楽しく生活しているところもあり、無人化しない限り生活があるということが大事だろう、そうした村落の生活の維持は、戦略的には集落間連携や生活機能の拡大としての広域的な生活間関係の構築によって営まれる方向にあると思う、それは旧来からの持続的な価値ではなく、新し

い価値のもとでの村落生活であり、集落をまとめる新しい価値として考えられるというものでした。これを受けて細谷会員から、松岡会員のとらえ方は大会での高橋明義会員の意見と共通する新しい提案だと思ふ、高橋会員は行政と集落の中間領域ということを指摘したが、集落間連携や広域的な生活間関係ということとつながっているだろう、村落をとらえる新しい提案ではないか、また小学校の統合、農協の合併といった動きとも連動させられるのではないかと意見が述べられました。その他、村落生活において教育機会の問題（通学条件）も重要なファクターになっていること（小林会員）、生活環境の創造における村落社会の歴史文化的要因（松村会員）などの意見も提起されました。

全体としてまとめることはしませんでした。前述の趣旨が十分に生かされ、有意義であったとの声が懇親の席で会員から寄せられました。最後に、世話人の不手際により、本報告が大幅に遅れましたことをお詫び申し上げます。

（文責：佐藤直由）

(snao@human.kj.yamagata-u.ac.jp)